

川崎市 市勢要覧 2020

# カワサキノコト



2020年→ソノサキ  
声援が、まちを変える。

Via 2020  
KAWASAKI  
SONOSAKI

## Colors, Future!

いろいろって、未来。

多様性は、あたたかさ。多様性は、可能性。

川崎は、1色ではありません。

あかるく。あざやかに。重なり合う。

明日は、何色の川崎と出会おう。

次の100年へ向けて。

あたらしい川崎を生み出していこう。



川崎市

川崎市ホームページ



川崎市

検索

川崎市LINE公式アカウント  
市の重要な情報をLINEでお届けします



LINE ID

@kawasakicity

検索

川崎市シティプロモーション  
担当ツイッター  
川崎が好きな情報が満載です



Twitter

@kawasaki\_pr

検索

### カワサキノコト

2020(令和2)年4月発行

発行:川崎市総務企画局シティプロモーション推進室 〒210-8577 川崎市川崎区宮本町1番地 TEL044-200-2287 FAX044-200-3915

制作:(株)SBSプロモーション首都圏支社 〒104-0061 東京都中央区銀座8丁目3-7 TEL03-6263-8778 FAX03-6263-8779



|   |    |  |
|---|----|--|
| Opening                                 | 4  |  |
| 2020 川崎人の肖像①<br>Portrait in KWS 2020→   | 6  | 古賀 紗理那 Vリーグ・NECレッドロケッツ                           |
|   | 8  | 上原 大祐 社会起業家／パラリンピック銀メダリスト                        |
|   | 10 | 芦野 壮史 等々力陸上競技場 グリーンキーパー                          |
|   | 11 | 下小田中保育園  |
| 市長対談<br>Talk About SONOSAKI             | 12 | 声援は、まちを変えられるのか？<br>studio-L 代表 山崎 亮 × 川崎市長 福田 紀彦 |
| 2020 川崎人の肖像②<br>Portrait in KWS 2020→   | 16 | 大平 暁 NPO法人 studio FLAT 理事長                       |
|   | 18 | 倉沢 よしえ シンガーソングライター<br>カナコレBAND ミュージシャン           |
|   | 19 | KATSU1 Bボーイ                                      |
| 自転車で巡るカワサキ<br>Along KWS Cycling         | 20 | ルート・1 南部 [川崎区～幸区]                                |
|   | 22 | ルート・2 中部 [中原区～高津区～宮前区]                           |
|   | 24 | ルート・3 北部 [宮前区～多摩区～麻生区]                           |
| 川崎人の一日<br>A DAY IN KWS                  | 26 | 田中 みずきさんの一日                                      |
|   | 27 | 須摩 修一さんの一日                                       |
| 川崎市 市勢要覧 2020<br>City Guide of Kawasaki | 28 | 川崎市総合計画 みんなでつくる 最幸のまち かわさき                       |
|   | 34 | 統計データ 数字で読み解く川崎市                                 |
|   | 38 | 歴史で見る川崎市の姿 153万人都市の歩み                            |
|   | 40 | 名誉市民・市民文化大使など                                    |
|   | 41 | 川崎市議会・市民オンブズマン制度など                               |
|   | 42 | 川崎市歌・川崎市民の歌など                                    |



Via 2020  
KAWASAKI  
SONOSAKI





2020年→ソノサキ  
声援が、まちを変える。

# Via 2020 KAWASAKI SONOSAKI

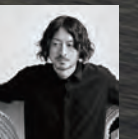
東京 2020 オリンピック・パラリンピック。  
心が一つになる瞬間、大きなムーブメントが起きています。  
私たちのまち川崎も、満ちあふれるエネルギーを蓄え、  
“声援”はピークに達しようとしています。  
その熱を冷ますことなく、次の時代、舞台へつないでいけたら、  
まちはどのように変わるのでしょうか。  
川崎の今を駆け抜ける人やその活動を通して、  
2020年→ソノサキの川崎を見つめます。

表紙のアートについて：現代装飾家 京森 康平

「多様性のある未来に向かって」をコンセプトに、港湾都市でもある川崎から、未来へ出航する船をモチーフに表現しています。船は、「音楽のまち」「工業都市」「緑豊かな自然」など、市のさまざまな魅力をイメージし、楽器や配管パイプ、植物などをいろいろなフォルムで表現して、多種多様な人が共存できる社会を表しています。中央には市民の木である「つばき」をモチーフにした柄を描いています。



(きょうもり・こうへい) 1985年愛媛県生まれ。2008年 ISTITUTO MARANGONI fashion master course 卒業。ヨーロッパ留学の際、密度のある装飾美術に感銘を受け、作品の制作を始める。歴史やルーツをひもとくことで見えてくる、国境や民族間を超えた文化の響き合いを現代の装飾絵画として描き出す。2019年からは、高津区の銭湯をリノベーションした「おふる荘」にアトリエを構え、川崎から世界へ装飾アートを発信中。







古賀 紗理那 ● Vリーグ・NECレッドロケッツ  
川崎のファンの声援が  
あと少しの後押しをしてくれる

# Portrait in KWS 2020 →

PROFILE (こが・さりな)  
NECレッドロケッツ所属。  
1996年生まれ。180cmの長  
身を生かし、チームでも全日本  
でも得点源として活躍。モットー  
は「継続は力なり」

「ホームのところきアリーナでの試合は、小さな子どもたちの『古賀ちゃん、古賀ちゃん』という声がかすかに耳に届くんです。私、見られてる！という意識が高まって、もっと堂々としたプレーを見せたいなという思いが強くなるのでとても励みになります」

Vリーグ所属のNECレッドロケッツのアウトサイドヒッター、古賀紗理那選手。来たる東京2020大会でも、日本の攻守の要としての活躍が期待されています。高校生にして全日本メンバーに選ばれ、4年前のリオ五輪最終予選では日本を救うプレーを何度も見せた古賀選手。ところが、リオ五輪本番ではまさかの代表落選。それだけに、2020年に懸ける思いは強いものがあります。

「東京五輪で結果を残すため、私が今なすべきことは、まずはこのNECで結果を残すこと。どの大会でも、優勝という形で終えたいなと思っています」

未来を見据えるため、まずは目の前にある課題を一つずつクリアしていくことを大切にしている古賀選手。

「大きな目標を掲げるのも大事ですが、小さな目標の積み重ねや、『これができるようになった！』という成功体験が1年後、2年後の自分に返ってくると思うんです。今であれば、『もう少しスバイクの通過点を上げる。もう少し力強くヒットさせる』というのが短期的なテーマです。そのためにどうすればいいのかを日々考えて、しっかりと

自己実現していきたいと思っています」

あと少し、を伸ばすため、地道な練習に励む毎日。ただ、試合本番ではファンの声援が、あと少し、の後押しをしてくれると言います。

「会場でのファンの方の声援で頑張ろうと思ったり、それまであとちょっとで届かなかったボールに届いたり。そういった力をもらえるんです。だからこそ、川崎での試合はたくさん大きな声援で後押ししていただけることが本當にうれしいですし、声援の内容からも川崎の皆さんのスポーツへの関心の高さと熱量を実感します」

古賀選手にとって、川崎というまちがチームに加入する前から「スポーツのまち」という認識でした。

「高校の頃から、東京で試合があるときはNECで事前合宿をしたりとお世話になっていました。熊本で育った私にとって、初めて見た川崎の印象は、ビルが高くて都会！ということ。そして、とてもスポーツが盛んなまちだということ。今も、バレーはもちろん、『バスケ頑張れ』『サッカー頑張れ』という旗があって、川崎全体でスポーツを応援しているんだ、と伝わってきます」

そんな川崎市民に、特に見てもらいたい自身のプレーとは？

「格好悪いくらい泥臭く、最後までボールを追いかけることです。そんな泥臭いプレーの先に、東京2020大会の金メダルがあるのかなと思います」

高校卒業後Vリーグ8チームによる争奪戦が繰り広げられ、NECレッドロケッツに入団。Vリーグ2年目となる2016/17シーズンでは見事優勝しMVPを獲得した。



ロンドン五輪銅メダル獲得の木村沙織選手の後継者として期待される、守備もできるアウトサイドヒッター。得点力だけでなくサーブからのブレーク力もチームになくてはならない存在だ。



# 川崎

## 2020 川崎人の肖像

オリンピック・パラリンピックの主演アスリートと、声援を送る人。新鮮でワクワクするような感性のアーティスト、シンガー、ダンサー…。今を魅力いっぱいに生きている人のなかにこそソノサキがある。



パラアイスホッケー日本代表として平昌2018冬季パラリンピックに出場した上原大祐選手の練習風景。



年齢・性別・障害のあるなしにかかわらず、誰もが楽しめる「世界ゆるスポーツ」。そのひとつ、イモムシになりきってプレイするラグビーではアンパサダーとして関わっている。

## Portrait in KWS 2020 →

川崎

### パラスポーツが 祭りではなく、日常化する 社会を目指して

上原 大祐 ● 社会起業家 / パラリンピック銀メダリスト



PROFILE (うへはら・だいすけ)  
1981年、長野県出身。元パラアイスホッケー選手。パラリンピックには3大会に出場。現在はNPO法人代表としてパラスポーツの普及に努める

いよいよ迫る東京2020オリンピック・パラリンピック。川崎でも、英国代表チームが本番に向けた事前キャンプを実施するため、新しい出会いや交流が生まれそうです。

実は英国は、世界屈指の「パラ先進国」。だからこそ、「英国代表の選手たち、そして、やってくるファンの人たちから学ぶべきことは多いはず」と教えてくれるのは、市内の企業に勤めながら、パラスポーツの普及にも努める上原大祐さん。パラアイスホッケー日本代表としてパラリンピックに3度出場。2010年バンクーバー大会では銀メダル獲得の立役者となった人物です。

「英国ではパラスポーツが、祭りではなく、日常化」されていたことに感銘を受けました。だから、どの競技でもスタジアムは満員。そして今でも、試合があればお客さんが集まります。それはなぜかといえば、子どもたちに継続的な教育をしているから。子どもが「行きたい」となれば、親も一緒に見に行きます。子どもたちをいかに巻き込んでいくか、身近なことで、と感じてもらうためにどんな教育をしていくかを考えることが大事だと思います」

現役引退後は、全国でパラスポーツの普及や教育・啓発活動に取り組み上原さん。そこから見えてきたのは、障害者やパラスポーツを、あくまでも「特別なもの」として捉えてしまう日

本社会全体の課題だと言います。

「最近、『共生社会』と声高に叫ばれていますが、僕はその前に『共有社会』を目指すべきだと思います。同じ場所、時間、体験をいかに共有できるか。今の日本って、分けたがりジャパン。女性・男性、障害者・健常者、高齢者・若者…。とりあえずカテゴリー別にくれば楽だと思っ人が多から、ひとまず分けてしまっ。そんな状況では、パラスポーツも、日常化されません」

そこで大事になるのは、「いかに面白がれるか」と「横展開」ではないかと上原さんは話を続けます。

「例えば、ボッチャの体験会にしても、ただやるだけじゃつまらない。僕は『電車の中でボッチャをやる』と提案して実現しました。今後はそれが観光資源になる可能性だっ。また、川崎市では川崎フロンタールの試合で日本で初めてセンサールームを導入するなど、障害者向け施策をいくつも実施しており、もっと横展開してつなげていけば更なる広がり生まれまっ。世間では2020年が『ゴール』と思っている人たちがばり。でも、私は、スタート。だと思っっている。なんなら、パラリンピック閉会式の翌日に、今後の日本がどう取り組んでいくかを宣言する開会式をしたいくらい。せつかくの機会だからこそ、その先に続く取り組みにしていきたいですね」





◀写真左から臼井香織(うすい・かおり)保育士、和田理香(わだ・りか)園長、鶴田映子(つるた・えいこ)保育士  
▼園児たちが英国に関心を持つ機会になった英国人ゲストとの交流会



## 子どもたちの声援が 国境を超えた親交を生む

和田理香 ● 下小田中保育園園長  
臼井香織 ● 下小田中保育園保育士  
鶴田映子 ● 下小田中保育園保育士

サッカーをはじめ、市民のさまざまなスポーツ大会が開催される「等々力陸上競技場」。その芝を守っているのが、グリーンキーパーの芦野さんです。

「もう23年になりますか、この芝生を管理するようになって。芝は2日に1回ぐらいのペースで刈っています。まずは年間の整備計画を作り、月ごとも計画を立てますが、天候は気まぐれなのでその通りにはいきません。臨機応変に変更しながら、微調整をしてフィールドの緑を守っています」

大変なのは日々の雑草の除去。種がついて落ちると増えてしまうので、その前に人の手で取り除くそうです。広大なフィールドの雑草をわずか2〜3人で抜いてしまうというから驚きです。

芝は年中緑に見えますが、実は夏と冬では種類が違うそうで、ベースは「夏芝」ですが、それが枯れるころに秋口に種まきした「冬芝」が伸びてきて、2種類の芝が継ぎ目なく入れ替わることで、美しい緑が保たれているのです。

とりわけ神経を使うそうです。

芦野さんもかつては体育系の大学に通っていたスポーツマン。それだけに、東京2020大会の思いもひとしおです。

「僕もこの仕事は長いのですが、2020年までは頑張るぞ、という思いでやっています。良い芝を作ることで、僕自身、オリンピック・パラリンピックに参加できると思っています」

今まで一番うれしかったのは、台風で大雨が降ったとき、ネットの掲示板に「等々力は風さえやめば大丈夫」とあったこと。それだけ水はけが良いことを、皆は熟知していたのです。

グリーンキーパーにとって何が大切かを問うと、迷わず「気持ちです」という答えが返ってきました。「芝の状態が悪いと、僕自身、なかなか表に顔を出せません。でも、良い芝ができたときは胸を張って表に出られます」

2020年、そしてその先へ、市民のために、胸を張れる芝を作りたいと力強く語ってくれました。

## 胸を張れる芝を作りたい

芦野 壮史 ● 等々力陸上競技場グリーンキーパー



PROFILE (あしの・たけし)  
1970年生まれ。大学を卒業した後、親戚が営む造園業の会社で経験を積み、等々力陸上競技場のグリーンキーパーに就任。美しい緑の芝生を守り続けている



さまざまなスポーツに幅広く利用される競技場の芝に求められるのは、タフであること。芦野さんは、暑い日も、寒い日も、雨の日も、普通に使える強い芝を作るよう心掛けている。



東京2020オリンピック・パラリンピックで英国代表チームの事前キャンプを受け入れる川崎市・横浜市・慶應義塾大学がチームを結成。「GO GB(がんばれ、英国)」を合言葉に、市民、学生と共に英国代表チームを応援し、さまざまな活動を行います。

## Portrait in KWS 川崎 2020 →

東京2020オリンピック・パラリンピックに参加する英国代表チームを、川崎市民が応援します。合言葉は、「GO GB(「I・ジービー」がなれば、英国)」。市内の公立保育園(30園)でも「英国チーム応援献立」として、給食で英国の家庭料理を提供するなど、関心を広める活動が行われています。

その一つ、中原区の下小田中保育園でも、英国伝統料理のシェパードパイに「ヤミー!(おいしい!)」と園児たちさらに英国人ゲストを招いた交流会ではゲストと「ロンドン橋」を一緒に歌ったり、英国ゆかりのキャラクター当てクイズをしたりと、英国の空気に触れた後、年長組の園児たちは和太鼓やダンスでのおもてなしをしました。

「心に刻まれた思い出は、東京2020大会のときだけでなく成長していく過程で、もっと英国への興味や理

解を深めていくと思うので、触れ合う機会がやっぱり大事ですね」と、交流事業のリーダーを担った臼井さんは子どもたちのうれしそうなお姿から実感したと話します。

また、英国と日本をはじめ、世界各国の国旗も自分たちで描き、たくさんの方が知っていることを知った園児たち「描いた数々の国旗と同じ柄を東京2020大会で目にしたとき、きっと親しみを感じると思います」と年長組担当の鶴田さんは話します。

川崎フロンタールやNECレドロケット、川崎ブレイブサンダースなど川崎ではいろいろなスポーツチームが活躍しているので、普段からも応援したり、影響を受けている園児たちだけに「園に近い等々力陸上競技場で英国代表チームの選手たちが練習することは、子どもたちにとっても刺激的で良い影響があると思います」

同保育園では、国籍や障害のあるなし、男女の差などに関係なく、子どもたちが自然に接し合い、助け合う力が育まれていると和田園長は言います。

「ますます多様性が当たり前の社会になっていきます。違いを受け止め合い、励まし合える寛容な人として、子どもたちが育っていくこと、それが豊かな未来をつくる原動力になると信じています」



## 声援は、まちを変えられるのか？

**ブランドメッセージに込めた想い**

**福田** 川崎には「Colors, Future!」というブランドメッセージがあって、未来。「これまでも、音楽のまち、スポーツのまち、などでアピールしてきましたが、結局このまちはどういうまちなんだろうということを考えて、市制100周年に向けて作り直しました。そもそも川崎は96年前には、人口4万8千人の小さなまちでした。それが今では30倍以上の153万人になっています。私の両親もそうですが、もともと川崎の出身ではありません。いろいろな人が移り住んできて、このまちで働き、子育てをしてきた。だから、元祖「ダイバーシティのまち」だと思ってるんです。多様性を大事にして、違いを認め合ってきたから川崎は発展してこられた。川崎市のブランドメッセージのロゴで描かれている赤、青、緑の3原色もその思いを表しています。混ぜ合わせ方で無数の色が生まれる。「いろいろ」こそが可能性であり、「未来」だという意味を込めています。

**山崎** そうですね、川崎には海外を含めていろいろなところから移り住んでこられた方がいます。個人的に、川崎は非常に便利なまちだと思います。東京の隣にあり、多様性と利便性、この二つが混在しているまちですね。

**福田** 確かに市民の皆さんに「川崎の良」と「ところ」を聞くと、「便利」という答え

が返ってきます。うれしい反面、私自身は微妙だなと思うところもあります。川崎は全国と比べても生産年齢人口が多いんです。でも、ひと昔前の男性だけがバリバリ働く社会の価値観で「便利」というのなら、ちよつと違うなという思いもあります。ただ住んで働くだけのまちじゃなくて、もつと豊かな暮らしがあるというか。近くでスポーツしたいよね、音楽活動したいよねとか、便利とは違う観点のものがいろいろあるところからにじみ出てくるようなまちが、良いまちなんだと思っています。

**山崎** 世の中には「不便」という言葉があります。それは経済成長させるためにはやらせた言葉なのかなと思います。川崎が4万8千人で暮らしていたころは、みんな道を作ったり、屋根をふき替えたりしていたんじゃないでしょうか。そうしたら都会から、「まだそんなことしてるの、あなたたちの暮らしは不便だね」なんて言われて、「屋根なんか職人に頼めばすぐふき替えてくれるよ」というふうにお金を払えば何でもやってくれる世の中になってしまった。より便利に、より経済成長することが良いと思ひ込まされてしまったんですね。

もはや、そういう流れに反抗しても良い時期かもしれません。私たちは「便利」なんかでひどくくりこりにされる暮らしをしてるんじゃないかと、自分たちの手で生活をつくり上げているんだと。そういう気概が川崎にはあると思います。「いろいろ」という観点から捉えていった方が今つぽ

いし、未来的だと思います。

**福田** 最近、小・中学校の50周年イベントによく招かれるんですね。行ってみると開校当時のことを地元の人々が話してくださるんです。木がないところにみんな苗木を持ち寄って植樹したり、花を植えたこと。行政じゃなく、まちの人が子どものためにやっていたんですね。実は、こういう田舎っぽさは今もそれぞれの地域に生きていて、都市部のように見える川崎にも、実はすごくウエットな感じが残っています。良い意味でおせっかい、放っておけない人が多い。川崎全体となるとイメージは薄まるんだけど、自分が住むエリアへの思いは非常に濃くて、「長く住み続けたい」という定住志向が強いんです。

**かわさきパラムーブメントと五輪のレガシー**

**福田** 東京2020大会が決まったとき、川崎市はどうするんだという話が出ました。施設の関係上、川崎市は競技の開催都市にはなり得ない。だから、「パラ」の部分に力を入れて、これからの社会課題と一緒に解決できる仕組みを無形のレガシーとして残そうとなったんです。

2012年のロンドン大会が、障害者を交えてのインクルーシブな大会として成功を収めたので、ぜひとも英国チームに来てもらおう、そして、ロンドン大会のレガシーを川崎でもっと進化させたいと思いました。そこで「パラ」という言葉と「ムーブメント」をつないで、「かわさきパラムーブメント」

## [市長対談]

東京2020オリンピック・パラリンピックに向けてさまざまな形で動きだした川崎市。その中の市民の自発的なプロジェクト「かつてにおもてなし大作戦！」の仕掛け人であるstudio-L代表の山崎亮さんと、福田紀彦川崎市長が2020年を迎えて、ますます盛り上がる川崎と、その未来について語り合いました。

# Talk About SONOSAKI

studio-L代表 **山崎 亮** × 川崎市長 **福田 紀彦**



PROFILE  
山崎 亮(やまざき りょう)  
1973年愛知県生まれ。大阪府立大学農学部、メルボルン工科大学環境デザイン学部を経て、大阪府立大学大学院および東京大学大学院修了。建築・ランドスケープ設計事務所勤務を経て、2005年にstudio-Lを設立。地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる

PROFILE  
福田 紀彦(ふくだ のりひこ)  
1972年生まれ。川崎市立長沢小学校・長沢中学校卒業後、渡米。米国アトランタマッキングトンジュハイスクール、ファーマン大学政治学専攻卒業。神奈川県議会議員、神奈川県知事秘書、早稲田大学マニフェスト研究所客員研究員などを経て、2013年川崎市長に就任する。現在、2期目。宮前区在住



という言葉を作りました。行政だけじゃなく、市民だけじゃなく、みんなで波を起こしていきける「ムーブメント」にして、次の時代につながるいろいろな取り組みを始めたのです。

**山崎** その話で思い出したのは、19世紀イギリスの「セツルメントムーブメント」です。ケンブリッジやオックスフォードの学生が、大学で学んだことを地域社会に還元するために始めた運動で、キャンパスを飛び出て低所得者などが住む地域に入り、法律相談や家計簿の付け方など、生活を良くしていくことを一緒に学び合う運動を始めました。

日本にもかつては「結」「講」「連」といった人の集まりがあり、助け合ってきた歴史があります。それがいつのまにか近代化され、スマートで儲かるものになっていく。税金を納めているんだから社会保障でカバーしてほしいとか、大きなお金を集めて再分配するようになっていく。確かにその方が合理的かもしれないけれど、もっと小さな運動として、お互いに助け合いの関係がつけられるような文化が川崎にもあったらどうと思います。東京2020大会をきっかけに「ムーブメント」としてそれを盛り立てていこうというのは、とてもいいことだと思います。

**GOGBY**  
かつてにおもてなし大作戦！

**福田** 川崎市と横浜市と慶應義塾大学は、東京2020オリンピック・パラリンピック

**山崎** ああ、車いすラグビーの日本代表選手の話ですね。以前、カナダのモントリオールで車いすラグビーの世界大会があった、その人は選手として参加したんです。それで、練習の合間に街に出たときに若いカップルから「写真お願いします」と声を掛けられ、てっきり選手の自分と写りたいのかと思って「いいですよ」と言う、「はい」とカメラを渡されたそうです。要はシャッターを押してほしいというお願いだったのです。彼、そのとき、ものすごくすがすがしく感じたそうです。カナダでは当たり前でも、日本では車いすに乗っていたら、まず人からものを頼まれることはないと言って、驚いていました。

**福田** この話を聞いて、私もびっくりしました。日本では、こういう風景はなかなか見られないですよ。心の中で何か邪魔をしている。そういう心の障壁を取り除いて普通に頼んだり頼まれたりする関係になることが、「パラムーブメント」でも起きるといいなと思います。

**カワサキの  
ソノサキについて**

**山崎** 「パラ」というと障害者のイメージが強いですが、私たちも年を取れば必ず環境と自分との間にいろいろな障害が立ち現れてきます。でも、老眼になって見えづらくなっても、眼鏡をかければ障害は乗り越えられるんですね。

つまり、「パラムーブメント」を続けることは、いま若い人も、将来このまちにずっと

クに際して英国代表チームの事前キャンプを受け入れることになっています。「GOGB」を合言葉にさまざまな取り組みを進めています。それに先立って「かつてにおもてなし大作戦！」というのをやっていて、山崎さんにも関わっていただいています。

**山崎** 「かつてにおもてなし大作戦！」は、来日する英国代表チームを「勝手にもてなしちゃおう」という発想で始まったのですが、それをきっかけにして、川崎市民のウエットな部分を引き出し、互いにもてなせるような関係性が築けたらいいと思っています。おいしいコーヒを入れて勝手にふるまうとか、手作りのくす玉を持って勝手に盛り上げるとか。小学生の野球の練習を見に行って音楽付きで「ガンバレー」と応援するとかね(笑)。今は本番の東京2020大会に向けて練習としてやっていますが、大会以降にもつながっていく活動にしていきたいと思っています。

**福田** 「かわさきパラムーブメント」のステートメントは「めざせ！やさしさ日本代表！」なんです。やさしさの連鎖みたいなものを生み出したい。応援されたい誰かを応援したくなりますよね。おもてなしされると誰かをおもてなししたくなる。「かつてにおもてなし大作戦！」もそうなると思います。

ところで、以前に山崎さんから伺った車いすラグビーの方の話、すごく良いエピソードだと思うので、もう一度お話しただけですか。

と住んでいいんだよというメッセージを送ることもなるわけです。生産年齢人口にとつて「便利」な川崎だけど、そうじゃなくなっても、皆が助け合い、生きていける住みやすいまちを実現していくことは大切なことだと思います。

**福田** 2020年は川崎にとつても節目で、65歳以上の人口比率が21%を超えると推計されています。これから超高齢社会に入っていくわけで、今後、本当にユニバーサルなまちとして、ハードもソフトも問われてくると思います。川崎ではスポーツイベントなどで障害のある方に「キヤスト」として働くことを体験してもらっていますが、これを単なるチャレンジに終わらせず、当たり前のこととしてインクルーシブな社会を実現することが大事だと思います。それをオリンピック・パラリンピックのレガシーにしていきたい。私たちのまちで、自分の住む地域で、気づいたらそういうことが普通になっていったら素晴らしいな一年にしていきたいです。

**山崎** 便利さも大事だし、経済も大事だけれど、やさしさが連鎖していくようなことも大切で、今は意識してその部分をつくる状況にあると思います。川崎は、「便利」は既に到達しているの、「かわさきパラムーブメント」をきっかけに、やさしさが連鎖する、住みやすいまちを、全国に先駆けて実現させようとしているように、私には見えます。これからの川崎に期待しています。

# Talk About SONOSAKI



撮影協力:川崎キングスカイフロント東急REIホテル

## めざせ！やさしさ日本代表！

みんなの違いを活かせるチーム。  
障がい、年齢、人種やLGBT  
いろんな個性をチャンスにしよう。  
川崎らしく、力強く。  
未来を変えていく力は  
私たちの中にある。



かわさきパラムーブメント



東京2020大会の期間に合わせてお披露目するエキシビジョンイベントに向けて、さまざまな「おもてなし」のアイデアが生まれています。



外国の人との交流を目的とするおもてなし。道行く人に英国代表チームに向けた応援メッセージをいただいて応援機運を盛り上げます。



世界リレー2019横浜大会出場の英国代表チームと市立高等学校の陸上部の生徒たちによる交流の様子。



英国代表チームに向けた応援メッセージ。いただいたメッセージはキャンプ期間中に等々力陸上競技場に掲出して選手に届けます。





2020年春、「コトニアガーデン新川崎」に誕生した生活介護事業所「studio FLAT」には、通所者が創作したアート作品を展示するギャラリースペースが併設されている。



ミュージアム川崎シンフォニーホール4階で開かれた「Colors かわさき 2019展」では、市内の障害者福祉施設・団体などで活躍する50人を超えるアーティストの作品が展示された。



# Portrait in KWS 2020 →

## 障害者アートという言葉 言葉をなくしていきたい

大平 暁 ● NPO法人 studio FLAT 理事長

川崎市文化財団主催で市在住のさまざまな個性を持つ人のアートを集めた「Colors かわさき 2019展」。大平さんは3年前からこの展示の企画を任せられています。多摩美術大学を卒業し、自身も作家である大平さんが障害のある人たちのアート活動に関わったきっかけは、障害者通所施設「セルブきたかせ」で絵画講師を務めたことでした。

講師とはいえ、初めは何をすればいいかわからず、ただ画材を用意して座っていただけの大平さん。運命を変えたのは、通所していたある自閉症の青年との出会いでした。創作意識のとても高い人で、いつしか青年が下絵を描き、大平さんがペン入れをして仕上げるという関係ができあがっていました。

「ものすごく細かいごだわりのある人で、何度描いてもダメを出されるんですよ。いったい僕はここで何やってるんだろうって、正直、自分のいる意味が分からなくなりかけていたんです」

そんなある日、大平さんがけがをします。すると青年が駆け寄ってきて「イタイ、イタイ」と言って「生懸命ばんそうこうを貼ってくれたのです。それ以来、2人の関係に変化が生じます。創作を通じて青年と心がつながっていたことに大平さんは気付いたのです。共同制作者としての信頼を深めた大平さんは「彼の作品を世に出したい」と願うようになりまし。ところが、その矢先

に青年はてんかんの発作を起こして亡くなってしまう。享年21歳でした。

「なぜ、彼の作品を世に出せなかったのか。もっと多くの人に見てもらいたかったのに」青年の死をきっかけに、大平さんは自らの使命を自覚します。展示を企画し、対外的な交渉をして、彼らの作品を社会に紹介する窓口になろうと決意したのでした。

そして2019年にstudio FLATを設立（2019年にNPO法人格取得）。現在、所属の作家は13人。その中で障害のある人の作品を企業活動と結びつけるNPO法人エイブルアイト・カンパニーに登録された作家も4人います。彼らの作品は傘や靴下、ワンピースなどのデザインに採用され、作家には企業から著作権使用料がNPO法人を通じて支払われています。

「よく『障害があるのに上手だね』という人がいますが、全く違うと僕は思います。彼らのアートは本当に個性的で、力があって、素晴らしい。だから『障害者』という冠は要らない。純粋にアート作品として見てほしいんです」

「自分の才能をお金にして、その才能で食べていく。そこには障害者も健康者もない。そのような社会の実現に向け、仕組みを構築し、次世代にバトンを渡していきたい」と大平さんは語ります。障害のあるなしにかかわらず、作品の魅力そのものがフラットに感じられる社会を目指して、活動を続けています。



PROFILE (おおだいら・さとる)  
1971年生まれ。多摩美術大学絵画専攻修士課程修了。  
studio FLATを運営し、障害のあるなしにかかわらずフラットにアート作品を見てもらい、魅力を感じてもらおう活動を続けている



studio FLAT 所属作家の作品：(左) 岡田隆之さん (右) 岡浩子さん



ワークショップで動物画を制作中の studio FLAT 所属の山内健資さん



「ブレイキン（ブレイクダンス）ってパフォーマンスだけじゃないんですよ。2024年パリ五輪で初の正式種目への採用が有力で、今注目されているブレイキンについて話すのは世界のダンスシーンでも影響を与え続けるBボーイ（ヒップホップに合わせてアクロバティックに踊るダンサー）のKATSU1さん。『技術力だけでは通用しない。人としての道理を持ち、人間のバランスがあるが重要だ』と言います。

12歳でマイケル・ジャクソンに衝撃を受け、人生にダンスの文字が刻まれました。大人になってヒップホップ発祥の地、米国サウス・ブロンクスまで赴き、その神髄を肌で感じてからは、さらにブレイキンが人に与える影響力と可能性を多岐にわたり、発信しています。

高校時代は部活後に近所の宮前区役所で、ガラス戸に姿を映してひたすら練習するときもありました。大学時代は既にストリートダンサーが少



## Portrait in KWS

### PROFILE

本名 石川勝之  
(いしかわ・かつゆき)  
国内外の大会で賞を勝ち取り、世界のブレイクダンスシーンでも影響を与える現役Bボーイ。株式会社IAM代表取締役。公益社団法人日本ダンススポーツ連盟 ブレイクダンス部長。ストリート文化としてだけでなく、スポーツ、教育など多岐にわたるアプローチを展開する



Red Bull主催イベントで踊るKATSU1さん



川崎市で開催のユースオリンピックの世界最終予選大会ではオーガナイザーとして関わった。

しずつ集まっていた武蔵溝ノ口駅コンコースに練習の場を移しました。

「溝ノ口駅は人がたくさん通るのでステージ感覚でテンションも上がるし、レベルが高い人たちも来ていたから、練習しがいがありましたね」

練習は、毎日19時から翌朝5時ごろまで、夜通し行います。「ときにはセッションをしたり、ダンスを介してさまざまなことを学ぶ良いコミュニティーの場になっていました。時間を惜しむほど練習し、大会で結果が出れば達成感につながるので、自分はこれをやってきて良かったんだと、みんな自己肯定できるんです」

また、川崎区の桜本商店街のイベントで踊ったときには、車いすの人が感激して立ち上がり、歩いてKATSU1さんに握手を求めに来るといった出来事もありました。「ダンスで人を感動させることができるんだ」という実感。自分自身も他人も力づけられるブレイキ

ンは、「人間力を高め、豊かな関係を育む共通言語」だとKATSU1さん。今ではブレイキンを「見るために」ではなく「練習するために」海外の人たちが溝ノ口に訪れるそうです。

「僕が18歳で優勝したときは、大会という場が川崎ルフロンくらいでしたが、今は世界大会で日本が優勝者を出すまでになったクラブチッタや、多くのダンサーが生まれている溝ノ口など、川崎は、ストリートダンスの聖地。とも言われるようになりました」

その発展に大きく影響を与えてきた人といえるKATSU1さん。「ストリート文化が若者の教育やグローバルな人間形成の分野にも発展して、川崎のまちはさらに厚みを増していくだろうし、僕の役割は、その一助となり続けることです」と情熱に満ちあふれています。

今や世界のトップレベルといっても過言ではないカワサキのBボーイたち。これからの活躍に期待が高まります。

## ブレイクダンスが カワサキの誇りに

KATSU1 ● Bボーイ



## 聴く人の日常に 静かに添う応援歌を

倉沢 よしえ ● シンガーソングライター

PROFILE (くらさわ・よしえ)  
宮崎県出身。沖縄の大学に在学中、音楽と出会い、ギターの弾き語りを開始。東日本大震災後ギターを持って一人被災地に足を運ぶ。そのときの経験と思いを胸に、日本全国へ歌を届けている

## 2020 →

川崎市民の歌「好きです かわさき 愛の街」を明るくはつらつとした声で歌うのは、神奈川県発の名曲を得意とするカナコレBANDのTOMOMIさんとKANAEさん。TOMOMIさんは作詞とボーカル、KANAEさんは作曲とハモリを担当しています。中学時代から一緒に歌ってきた親友で、ハモリーはもちろん、互いに考えていることが分かるほど息が合っていると言います。

宮崎の高校卒業後、音楽で生きていくと決めた2人は長崎を経て東京へ。ジュニアのど自慢大会でグランプリを受賞しNHKホールに立った経験も。でも、歌の道は険しく3年で宮崎へ帰ることに。「大好きな音楽を嫌いにならないための決断でした」と振り返ります。

しかし、「地元で歌い続けているうちに、一度きりの人生だから、やっぱり夢に向かつて突っ走ろう」と再上京を決意。偶然にも同じ九州出身者が集い、「溝ノ口劇場」誕生とともに劇場の公式バンドとして結成されたカナコレBAND。第9回のカワサキストリートミュージックバトルのグランプリに輝きました。

「川崎は音楽のまちだけに、お客さんの反応が良く、多世代で喜んでくれるからうれしいですね」と2人。

「応援してくださいの方たちがいたから頑張れたんです。自信を持って歌い続けることが自分たちを後押しする力になり、さらに人を力づけられることに気付きました。「だから大好きな音楽で『音（おん）返し』をしたい！」

## カワサキを舞台に 音（おん）返し

カナコレBAND ● ミュージシャン



PROFILE (かなこれ・ぼんど)  
メンバーは男性3人、女性2人からなる。歌い継がれる神奈川発の名曲の数々を披露する、溝ノ口劇場公式BAND

▼写真左がTOMOMIさん、右がKANAEさん



中島みゆきさん公認で「フアイト！」をカバーする倉沢よしえさん。

「この曲が歌いこなせるようになったら、自分の表現はもっと力強く、幅も広がると思っています」。聴く人それぞれ響き方が違い、正解が未知数とも言えるこの語りの曲が、自身の歌唱力のバロメーターです。

20歳からギターで弾き語りを始め、挫折も経験し就職したことも。でもやっぱり歌の道へ。ステージでは全身全霊で歌い、「終わると同時に燃え尽きる」と表現する倉沢さん。「次のときには脱皮して、また歌い切り、そして燃え尽きる。この繰り返し（笑）。ステージの上では無敵です。やり切った瞬間を毎回感じられる私は幸せ」

第8回のカワサキストリートミュージックバトルでは、準グランプリを受賞。川崎ブレイクサンダーズの試合のハーフタイムで歌ったことも。

自分のオリジナル曲を並べてみたら共通点が「孤独と闘い、孤独を自分の味方にする」、倉沢さんの内面とも重なっていたそうです。「オリジナル曲もやっぱり人生を歩むための『応援歌』なのかな」

空気のようにその人の日常の中で自分の歌が流れている、そんな存在になりたい。「フアイト！」を大事に歌い続けてきたからこそ、情熱的なメッセージだけがエールではないことを知った今、彼女の歌声は柔らかく、かつ太く心に響きます。